# 半導体漫遊記 ⑭

湯之上隆

## ルネサスがIDT買収を発表

## 中国の司法当局が認めるか

ルネサスエレクトロニクスは2018年9月11日、米国の半導体メーカーIntegrated Device Technology（IDT）を買収すると発表した。買収金額は約67億ドル（約7300億円）で、日本半導体メーカーのM&Aとしては過去最大級となる。

今後、IDT株主総会での承認や、各国での独占禁止法の審査などの手続きを経て、ルネサスがIDTの株式を1株当たり49米ドルで買い取り、早ければ2019年前半に、IDTはルネサスの完全子会社になるという。

IDTは、タイミングデバイス、メモリインタフェースIC、無線給電用デバイス、センサーデバイスなどミックスドシグナルの半導体を設計しているファブレスである。IDTのグレゴリー・ウオーターズCEOは、「人の五感を複写する半導体で世界を変える」と豪語している。

車載半導体を強みとしているルネサスの呉CEOも、買収するIDTには、クルマの目や耳になるセンシングの技術を期待している模様である。しかし、この買収には、幾つかの不安もある。

まず、IDTの昨年の事業構成比率は、データセンター向けが全体の4割を占め、通信インフラ向けが約3割、家電向けが約2割、車載向けはたった1割しかない。その1割も、IDTが2015年に買収したZMDIの事業である。つまり、IDTには、車載半導体の実績があまりない。

また、IDTの業績は、2018年3月期の売上高は前期比16%増の8・4億ドル、粗利益率50%超、営業利益1・11億ドル、営業利益率13・2%と、超優良企業と報道されている。

しかし、1990年以降を見てみると、IDTの業績は非常に不安定であることが分かる。売上高は、ITバブルが崩壊した2001年に大きく落ち込んでいる。また、2008年のリーマン・ショック以降も、じり貧となった。その際には、10・44億ドルという巨額の営業赤字を計上した。恐らくIDTは、2001年と2009年に、死にかかったのではないか。

営業利益のデータは2004年以降しかないが、おそらく2001年以降、赤字経営が続いていたものと思われる。その不振から何とか脱却し、売上高が増大して黒字化を実現したのは、ビッグデータ時代を迎えた2014年以降のことである。日経新聞やルネサスのIDT買収の記者会見では、好調な2014年以降の業績しか報道していない。IDTの2013年以前の赤字経営の実態は、敢えて伏せていると勘繰らざるを得ない。

さらに、もっと不安なことがある。IDTの最近の地域別売上高構成は、米国9・5%、欧州12・8%、日本8・0%、アジア69・6%となっており、アジアのほとんどが中国向けビジネスであると思われる。

現在、米国と中国が激しいハイテク貿易戦争を行っている。中国の司法当局は、米ベインキャピタル率いる日米韓連合による東芝メモリの買収に難色を示した（買収は完了した）。また、米クアルコムによるオランダNXPへの買収は、却下された。その中国が、ルネサスによるIDTの買収を許可するだろうか？　この買収は、中国の独禁法の審査が最大の難関になると思われる。

（微細加工研究所・所長）

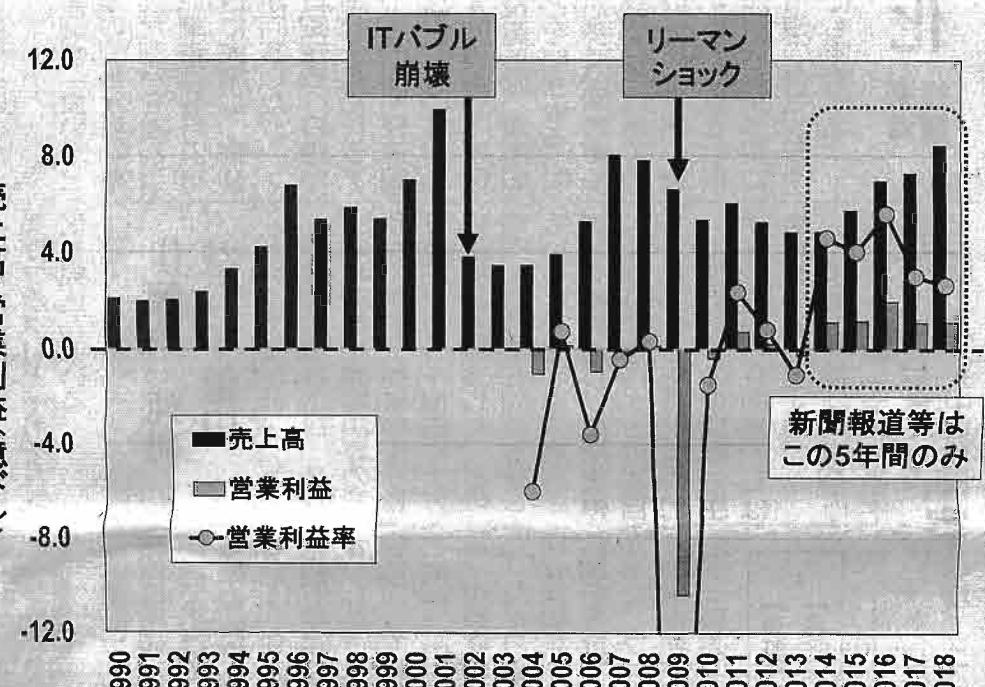


図1　IDTの売上高、営業利益（率）

出所：電子ジャーナル『半導体データブック』およびIDTのマニュアルレポートを基に筆者作成